

国際的にみた *Helicobacter pylori* 感染と胃癌の関係

An international association between *Helicobacter pylori* infection and gastric cancer: *The Eurogast Group* (Lancet 341: 1359-1362, 1993)

Helicobacter pylori (以下 H.P) 感染が、胃癌のリスクファクターであることを示す証拠が増えており、前向き疫学的研究は、血清中の抗 H.P 抗体陽性者では、胃癌になる頻度が 3~6 倍に増加することを示している。EUROGAST study (ヨーロッパの 14 地域と日本の宮城・横手およびアメリカの 1 地域についての共同研究) では、H.P に対する IgG 抗体の検出を行うことにより、胃癌と H.P との関係进行调查した。

25~34 歳と 55~64 歳の 2 つの年齢層から、男女それぞれ 50 人の健康者を運転免許証番号などを利用して無作為に選び、血清を採取した。血清は、それぞれの地域から同一のプロトコールにより保存・輸送し、H.P の IgG 抗体測定は単一の研究所で ERISA 法にて行った。Cut off 値は 10 $\mu\text{g/ml}$ としたが、この設定の感度と特異性はアメリカからの標

準血清に対してそれぞれ 96% と 93% である。胃癌の累積有病率および累積死亡率は 1980 年代前半のものを利用し、H.P 抗体陽性率に対する関係は回帰分析により行った。

17 の地域全体でみると 3,194 例中 1,563 例 (49%) で H.P 抗体陽性であり、25~34 歳の年齢層では 1,558 例中 543 例 (35%) で、Oxford (イギリス) の 8% から Adamowka (ポーランド) の 70% まで 9 倍の差があった。55~64 歳のグループでは 1,636 例中 H.P 抗体陽性は 1,020 例 (62%) で Copenhagen (デンマーク) の 31% から Adamowka と宮城の 87% まで 3 倍の差があった。陽性率は高齢層のほうが高いが、男女間の差は認められなかった。

男性・女性とも H.P 抗体陽性率と胃癌の 0~74 歳累積有病率・死亡率の対数との間には統計学上有意な関係が得られ、全症例において H.P 抗体陽性率と死亡率では回帰係数 1.79 ($p=0.02$)、有病率では 2.68 ($p=0.01$) であった。すなわち H.P 抗体陽性率が 10% 高い地域では log で示した胃癌死亡率は 18%、有病率は 27% 増加する。全例に比較すると 0~54 歳累積胃癌死亡率・有病率と 25~34 歳における H.P 抗体陽

性率の回帰係数はより高く (死亡率 2.30・有病率 3.60)、55~74 歳累積胃癌死亡率・有病率と 55~64 歳の H.P 抗体陽性率の回帰係数よりも高い結果を得られた (死亡率 1.73・有病率 2.53)。有病率が死亡率よりも高い回帰係数となった理由は、有病率を調査できた地域が 11 に限られたためである。回帰直線よりも胃癌の頻度が低かった地域として Minneapolis (アメリカ) などが、高かった地域として宮城などがあった。

17 の地域において健康者における H.P 抗体陽性率と胃癌の有病率・死亡率は統計学上有意な関係がみられた。各地域間の 10 倍におよぶ胃癌頻度の差の少なくとも一部は H.P 感染によるものである。経済状態は胃癌と H.P 感染の両方のリスクファクターであるが、教育レベルを揃えて分析しても、回帰係数は死亡率で 1.53、有病率で 2.60 と有意であった。

0~74 歳の累積死亡率でみると、われわれのデータからはもし 100% H.P に感染している地域があるとしたら、H.P 感染率 0% の地域の 6 倍も胃癌が多い計算になる。

(関東通信病院消化器内科

齊藤 光浩 抄)